

## 悲しみの分かち合い～公正な税制を求めて

一般社団法人日本想続協会  
代表・税理士 内田麻由子

私たち日本人の多くは、「税金＝取られるもの」という意識が強いようです。税理士としてお客様へ、所得税や相続税、法人税や消費税の金額をお伝えすると、「はあ～、そんなに税金を取られるのか……」と嘆く声をしばしば聞きます。また、会社勤めの方は、源泉徴収と年末調整により、税金のしくみもよくわからないまま、税金を「取られている」と感じています。果たして税金は、本当に「取られる」だけのものなのでしょうか？

### ●悲しみの分かち合い

スウェーデンの人々の納税意識について、東京大学名誉教授（財政学）の神野直彦さんは、著書『税金 常識のウソ』で、次のように述べています。

「スウェーデン語でオムソーリといえは、社会サービス（福祉・医療・教育など）のことです。ところが、このオムソーリの元来の意味は、『悲しみの分かち合い』なのです。もちろん、『悲しみの分かち合い』である社会サービスは、租税で支えることとなります。スウェーデンでは、『悲しみを分かち合う』と、悲しみに暮れている人だけではなく、悲しみを分かち合った人も、幸福になると信じられています。というのも、人間が幸福だと実感できるのは、自分が他者にとって必要な存在だと実感できた時だからです。悲しみを分かち合うと、自分が悲しんでいる人にとって、必要不可欠な存在だと実感できます。それだから租税を負担し合うのだと認識されているわけです。」

### ●悲しみの水脈

「ミシュカの森」の入江杏さんは、「悲しみの水脈の広がり」について次のように語っています。

「個人の悲しみは、それぞれ大きさも形も違っていて、それらは一見何の関係もないように思えます。でも、悲しみを誰もがもつ感情ととらえ、地中に水脈が広がるように、それぞれの悲しみが目に見えないつながりをもっていると考えてみたらどうでしょう。そうすれば、悲しみをもっと大きな存在として共有できるのではないのでしょうか。」（『悲しみを生きる力に』岩波ジュニア新書）

## ●自己責任論の嘘

「悲しみの分かち合い」「悲しみの共有」と対極にあるのが、いま私たちの社会にまん延している「自己責任論」です。「反貧困ネットワーク」の活動などを通じて、貧困と格差の問題に取り組む、弁護士 宇都宮健児さんは、著書『自己責任論の嘘』で、「自己責任論は、大量に貧困を生み出している、わが国の制度の欠陥や政治の責任に目を向けない考え方です。」と述べ、自己責任論は、市民同士の共感を遮断し、市民と市民を分断してしまうといいます。

## ●ピケティと格差社会

フランスの経済学者トマ・ピケティ氏は、著書『21世紀の資本』で、「格差は放置すれば拡大し続ける」と警鐘を鳴らし、所得税の累進課税強化と世界的資本税の導入を提唱しています。700 ページを超える和訳本はとても読めないのが、竹信三恵子さんの『ピケティ入門』を読みました。竹信さんは本書で、日本における賃金格差や教育格差などの問題にも触れ、格差拡大が引き起こすマイナスを広く共有することが大切であると説いています。

## ●公正な税制を求めて

日本の格差拡大の要因には、大企業や富裕層を優遇する税制や、自己責任論で弱者を切り捨てる社会保障制度の改悪があります。不公正な税制を是正し、所得再分配の強化、税制の透明化などに向けた取り組みが必要である——弁護士 宇都宮健児さんや「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」代表の赤石千衣子さんらが呼びかけ人となり、『公正な税制を求める市民連絡会』が、今月中旬に発足します。連絡会では、シンポジウムなどを通じて、関心のある多くの市民・団体の方々に参加を呼びかけていきます。私も微力ながらお手伝いしています。

## ●税金を「取られる」から「託す」へ

市民の立場から税制や社会保障制度のあり方を問い、本当に困っている人や子どもたちのために税金が使われる社会を私たち市民の手でつくる——税金を「取られる」のではなく、税金を「託す」ことのできる社会を、共につくっていきましょう。



◆好評4刷、1万2000部！

アマゾン「相続税・贈与税」ジャンルで1位獲得！

『誰も教えてくれなかった

「ふつうのお宅」の相続対策ABC』

(セブン&アイ出版)

税理士 内田麻由子・弁護士 武内優宏 (共著)

この1冊で、相続に関する法律・税金の基礎知識と、さまざまな「ふつうのお宅」の失敗事例・成功事例が学べる、とってお得な書籍です。終章では、円満な「想続」のために大切な心得についても述べています。家族みんなで読みたい1冊。